
大津波により壊滅的な被害にあった地域病院の復旧の道

(石木幹人. 全自病協誌 10: 1530-1535, 2011)

2012年1月13日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

筆者が働く陸前高田市は四季折々の山の幸、海の幸が堪能できる自然豊かで人情味にあふれた住みやすい街である。県立高田病院は地域の高齢者医療を中心に介護福祉と連携を取りながら経営しており、これから増床しようと考えているとき3月11日の大震災が起こった。

地震による病院内の被害は物的被害のみで人的な被害はなかった。津波が来ると1回の電源部は水につかり、電源機能が壊滅する。4回には人工呼吸器をつけた患者が3人おり、その患者たちの呼吸機能の確保が必須であった。筆者は患者の対応をする責任医師を決め、災害本部を立ち上げた。しかしながら津波情報を得ようにもテレビも全く映像も出ず、ラジオも雑音のみで津波が来るとの市内放送が流れたのも地震から30分以上たってからであった。

病院の3階からは津波が平野を超えて迫ってくるのが見え、病院の駐車場まで到達するのを見ながらできるだけ上の階に避難するように指示を飛ばした。結果として3階に向かう階段まで水があふれ出した。4階まで津波の影響を受け入院患者は51人いては39名の生存が確認された。人工呼吸器装着の3名のうち1名は看護師と医師の決死的な介助により生存していた。スタッフは9名安否不明であり屋上に避難した患者たちも看護師たちの献身的な開度にもかかわらず3名死亡した。

被災初期では高田市内の医療機関のうち被災を逃れたのは山間部だけであり、診療所、病院、調剤薬局すべてが倒壊した。翌日から日赤など続々と応援チームが入り診療機材など何もない状況の中抗凝固剤やステロイド、降圧薬などを受け取った。被災後疲労困憊のため、全国各地の医療サポーターに任せ県病院はすべての医療職員に休暇をだした。休暇後職員全員によるグループワークを行い、当面の目標として訪問診療を被災前より充実させること、外来棟をより早く立ち上げることにした。保健師活動との連携は欠かせず、陸前高田市全住民の保健師によるローラー作戦が始まった。

筆者は今回の被災を通して感じたことを4つ述べている。

1. 通信遮断の可能性について

被災直後、地震の大きさから津波の可能性については頭に浮かんでいたが、通信が全く遮断されるとは考えていなかった。テレビ、ラジオは機能せず、趾や消防隊からの連絡もなかった。津波警報を聞いたのは津波にのみこまれる数分前であり、大地震のときは、何らかの理由で従来ある通信手段がすべて機能しなくなることがあるとの認

識を持つことが大事である。情報が入らない時にどう動くかなどの訓練も大事である。

2. 多くの支援への対応

被災当初より様々な支援をたくさんいただいた。特に医療チーム、DMAT には患者輸送などで大変心強い支援をいただいた。その後の日赤のチームには医療立ち上げに大きく助けてもらった。その後全国から続々と支援の申し出があり、各サポートチームでの申し送りも行われ派遣チームが交代しても交代当初からの仕事の混乱はほとんどなかった。おかげで陸前高田市の状況は整然とし、支援チームのための初期活動コーディネートはうまくいったと思われた。

3. 医療におけるチーム医療の大切さ

陸前高田市の医療は被災により完全に崩壊したといってもよい状況だった。市との連携は大変大事で、市の職員が筆者を市全域の避難所に案内した。市ではいち早く連合協議会を立ち上げ、市内で展開するすべての職種、ボランティアたちが集まり、現状報告、今後の課題を話し合った。これが病院都市の職員、保健師、ほかの職種の人たちと医療を結ぶ役割として重要であった。この市全体のチームワークが現在の高田病院を作っていると筆者は実感している。

4. 職員の生活支援や健康支援

被災し生活の基盤を失った職員が多数いた。さらに恐怖の体験し心の傷を持つ職員も多数いるに違いなかった。忙しい病院復興のため日常業務をこなしていると、つい忘れがちな職員の生活、心も含めた健康状態について、しっかり配慮思案すんして仕事ができる環境を整えることが必要である。

最後に筆者はたくさんの人たちに支えられてここまで来たとし、まだまだ高田病院のスタッフだけでは抱えきれない問題がたくさんある。今までの支援を紙面を借りて感謝するとともに今後の支援も切に願っている。